

「中医学の普及のために、薬剤師としてできること、また本来の薬剤師像とは」
昨年 の 学 術 総 会 において、シンポジウム「これからの薬剤師に求められる中医学」の座長を努めさせていただきました。まず、ご多忙のなか、ご講演を引き受けていただいた先生方に御礼申し上げます。また取材のために多くの新聞・雑誌等関係者の方にもお集まりいただき、ありがとうございました。

この薬剤師によるシンポジウムは、西野裕一先生（日本中医学会評議員）のご尽力により、初めて開催することができました。詳しくは本稿をご覧くださいと思いますが、それぞれの先生のお話から、中医学を柱とした薬局がそれぞれの地域でしっかりとした存在感をもっていることがわかります。

ただ、「中医学」に対する世間の認識はまだまだ低いことは否めません。ある中成薬メーカーの調査によれば、日本国民の認知度は1%とのこと。今後私たちは学会内で医師・鍼灸師・薬剤師の垣根を越えた交流と研鑽を重ねると同時に、「中医学」をどのようにして広く世間に浸透させていくかが大切だと感じています。

その1つの取り組みとして、長春中医薬大学と本学共催で「中医学実践講座」（初級・中級・上級・短期の薬膳・推拿コース）を3年前から行っています。

受講者の約3分の1が薬剤師など医療関係者、あとは一般の方で、述べ約600名の方が参加されています。

また、この夏には、日本中医学会と本学共催で「薬学生・薬剤師のための中医学セミナー」を開催し、約30名（学生20名、薬剤師10名）の参加がありました。中医学を教えている大学はまだ少ないなかで、主に都内のいろいろな大学から学生が集まってくれました。また、今は調剤業務などに携わっている薬剤師のなかにも、中医学に興味をもっている方が少なからずいることがわかりました。

「未病先防」を柱とする中医学の知恵は、これからさらに進む高齢化社会において必ず役に立つツールとなります。さらに、食養生・生活習慣を含め身体全体を診る中医学は、「かかりつけ」「健康サポート」を標榜する薬局、それを担う薬剤師の大きな武器になることは間違いありません。西洋薬だけでなく中医学の知恵を身につけること、それが社会に必要とされる本来の薬剤師像となるはず。最近、一般調剤薬局やドラッグストアの一部にはそのことに気がついている動きがあります。そのような世の中の傾向は大歓迎ですが、大きな波に飲み込まれないよう、学会・個店・個人においても存在感をしっかりとっておかなければならないと思います。

最後に、今年の学術総会においても下田健一郎先生を座長に3名の先生によ

るシンポジウム「薬局における中医学相談」が行われました。内容については、今後、本誌面で紹介いただくことと思いますが、これまで学会等で発表する機会にあまり恵まれなかった、われわれ薬剤師に門戸を開いていただいた、酒谷薫理事長、平馬直樹会長はじめ幹事の先生方に改めて御礼申し上げますとともに、今後もいろいろな現場で活躍する多くの薬剤師の先生方にもご参加・ご協力をいただき、このようなシンポジウムのさらなる発展を支えていただきますようお願い申し上げます。

日本中医学会評議員
東京薬科大学中国医学研究室准教授
猪越 英明